

平和の花

柏原中学校 3年 余田 優月

「遺族の家」と書かれた水色の小さな表札は、太平洋戦争に出兵した兵士が戦死した家であることを示している。祖父の店にもこの表札があった。戦死したのは祖父の兄、忠二さん。旧制中学校を卒業後、薬局を開くという夢をかなえるために大阪の薬問屋で働いていた。召集令状が届き、忠二さんは陸軍の衛生兵候補者となって、姫路で半年ほど訓練を受け、中国に派遣された。約三か月後、地雷に遭い二十二才で亡くなった。ほぼ即死だったそうだ。忠二さんが戦死した状況は、上官だった方や同じ部隊にいた方々が送って下さったたくさんの軍事郵便で知ることができた。

「彼は立派な国家の華でした。」

「国のため花となり散りゆかれ、実に見事でありました。」

忠二さんの死を花、華と書いたものばかりだ。広辞苑によると花という漢字には植物の他に荣誉という意味がある。「国のために花と散る」の意味は、「祖国のために潔く死ぬこと」と書かれていた。戦争中は郵便物に検閲が入るので、表現は難しかったと思う。戦争に対してマイナスイメージな行動をとると、非国民と言われ、冷たく扱われたことがあったと社会で習った。忠二さんの死は荣誉なことです、と書かれたいくつもの手紙を見て私はとても悲しく、くやしくなった。そして戦死が美談にされる恐ろしさも感じた。

祖父が忠二さんについて記憶していたのは二つのエピソードだけだという。中国に渡る前に帰ってきた時に見た背の高い兵隊さんというイメージ。もう一つは「チョーソー、おめでとうございます」の言葉である。チョーソーは町葬のことで、忠二さんのお葬式を町が行ってくれたことを表す。祖父の記憶から考えると、ここでも忠二さんが戦死したことが美談にされていたことが分かる。

「この度はおめでとうございます」

「ありがとうございます」

当時四才位だった幼い祖父の記憶に残る遺族と弔問客の会話がこれだった。町葬のときに、

「おめでとうございます、と言われたらありがとうございます、と言って頭下げるんですよ。」

と言い聞かされていたエピソードが町葬おめでとうございますの記憶となっていた。

家族の死を祝うような言葉。それに対し感謝の気持ちを述べなければならなかった遺族。戦死はすばらしいとする考えは、遺族が死を悲しむことも許さなかった。町葬の後、曾祖母は悲しみのあまり人前に出ることをせず、毎日のように仏壇に手を合わせ続けたそう。幼い祖父以外の兄姉たちは軍事工場で飛行機の部品を作るなどして働き、終戦をむかえた。曾祖父は幼い祖父を手伝わせながら油や砂糖、はき物の配給所となった店を続けた。

戦死をさらに美化するかのように曾祖父に祭葬料や有名な方からのほめ言葉や弔慰金が届けられた。お金もほめ言葉も曾祖父の悲しみを救うことはなかった。その証に、いただいたお金のほとんどを曾祖父は学校や遺族会への寄付や多くの人を使う建物の建設に使い、記録となる感謝状を残していた。そして「忠二遺品」と書いた段ボール箱の中に中国から戻ってきた遺留品と一緒に感謝状を束を丸めるように入れ封じていた。曾祖父の行動には

「命の重さはお金に換えられるようなものではない。」
という無言の意思表示が含まれているのだと思った。

今夏、私は大好きだった祖父から受け継がれている遺族の思いを考えてみた。戦争が起こることで人の感情まで奪われていく恐ろしさを受けとめることができた。戦争を経験していない平和な時代に生まれた一人として、戦争について学び続け、次世代に思いをバトンパスしていくことが大切だと思うようになった。祖父が亡くなったのは私が五才のときだった。生前の祖父から戦争体験を直接聞いたことはなかったと思う。しかし、

「ゆんたん、大きくなったら何するのやろ。好きなことせえよ。」
と言っは、アイスクリームを半分こしてくれた。私の将来を楽しみにしてくれていた。遺族の家の表札の意味を知ったことで自由に将来を夢見て、自分を社会の中でどう生かしたいかを考えられる今の平和な時代のありがたさや重さ、命の大切さをしっかり受けとめることができる自分でいたいと思う。花と散ることを美しいとたとえるのではなく、誰もがそれぞれの「花を咲かせる」ことを喜び合える時代を担っていきたい。そのためにも戦争について学び続け、語りつぐことができる一人となり、小さな力だが、平和を守る一歩を踏み出そうと思う。